

## ゲーテ紀行

### 「ゲーテハウス」で文豪の生涯を偲ぶ

『若きヴェルテルの悩み』＝多感な高校時代に胸躍らせる

『ファースト』＝悪魔(メフィストフェレス)の誘惑と人間の道と

今思えば、私は担任の先生にとっても恵まれていた。中学時代のM先生は国語が専攻で特に日本文学に造詣が深かった。志賀直哉の『城の崎にて』を教材に文章論を展開、ホームルームの時間には島崎藤村の「小諸なる古城のほitori」にメロディをつけ全員で暗唱した。(母校は小諸と同じ信州で、南部の伊那谷にあった)

高校時代のK先生は世界文学に力を入れていた。よく指導されたものだった。「大作を読みなさい。大作を！今、全部わからなくてもいいから。読み終えたらきっと人生の深みを感じられると思うよ。少し偉くなったような気持ちになるかもしれない」と。そして夏休みには、徹底した読書を勧められたのだった。

現在、自分が進めている定年後のライフワーク「世界文学紀行」も、この二人の先生の影響が多分にあったことは間違いない。恩師にはあらためて感謝しありがたく思っている。感受性の豊かな青春時代に、良質な人生の刺激を与えられることはとても大切なことだと思う。



ゲーテハウス

『若きヴェルテルの悩み』は前著よりも読みやすかった。ゲーテが25歳のときに発表した作品である。内容は大人の世界の恋愛模様で、まだ初心な自分には深く理解するには難しかったが、それでも若い男女間の心のやりとりと懊悩は、心に何か残っていた。最初に目を通した時から50年あまり、つまり半世紀後の自分は、それなりの人生経験を積んだかもしれない。こちらは以前より深く読めたような気がする。

一言で表現すれば、典型的な恋愛小説(悲劇)だが、時代が異なるとはいえ、昨今の軽い恋愛小説とは重さが違う。それにしても、礼節をわきまえながらも、新婚の夫人にいつまで

も惹かれていくヴェルテルの気持ちも異常である。その行き着いたところが愛してやまないロッテの新夫アルベルトから借りたピストルでの自殺だった。若者が悩みながらも命をかけて愛を求めていった姿が読者の共感を呼ぶのだろう。

ロッテの心と身体の美しさ。アルベルトの高貴な人間性。そして純な心で悩み続けるヴェルテルの世界は、現在の社会ではほとんどあり得ない世界である。自分も胸躍らせ共感しながらも、遠い「別世界」の物語として読んだような気がする。それでも、心のどこかに深い滋養のようなものが残っているところが、名作のゆえんなのであろう。



遠くまで広がるドイツのブドウ畑

<ストーリーの概略を伝え、とりわけ印象に残る文から>

『若きヴェルテルの悩み』 世界文学全集<集英社>第7巻(柴田翔訳)

p 381 この世に比べようもなく愛らしい存在のひとりと、ぼくがどうやって知り合うにいったか――。

p 398 ああ、僕の指が偶然彼女の指に触れたり、ぼくらの足がテーブルの下で互いに 出会うことがあると、ぼくの全血管をわななき走り抜けるものがある！ぼくは炎に触れたかのように身を引く。・・・ぼくの唇に触れんばかりになる。そうすると、ぼくは雷に打たれたかのごとく、気を失いそうになる。

p 426 二通の手紙ありがとう。<物語はヴィルヘルムに出した手紙の形で進んでいく>

p 453 何故、私ですの、ヴェルテル？ほかならぬ私ですの、もう他の人の持ち物になっている？ほかならぬ決まった女ですの？・・・思い切って下さいまし！旅にでもお出になったら、多分、いえ、きっと、お気もまぎれましょう。そして、貴方の愛にふさわしい方をお探しになって、お見つけになって、そしてどうぞ、ご一緒に戻って来て下さいまし。そして私どもにも、真実の友情のこの上ない幸福をともに楽しませて下さいまし。

p 454 そうなのです、ロッテ！ ぼくら三人のうち誰かひとりには去らねばならず、そのひとりであろうと、ぼくは欲するのです！おお、いとしい人！・・・ぼくの墓に、あなたの視線を向けてください。

p 458 (ピストルを手に)これはあなたの手を触れてきたのですね。あなたが埃を払ってくださったのですね。ぼくはこれに千度口づけします、あなたがこれに触ったのですね。

p 469 ぼくは君の友情を裏切ったが、アルベルト、君は赦してくれよう。ぼくは君の家庭の平和を乱し、君ら二人の間に不信の念を生じさせてしまった。さようなら！

『ファースト』 世界文学全集<集英社>第7巻(井上正蔵訳)

p 15 メフィストフェレス では、賭けでもしますか？わたしは旦那の手から、必ずあの

博士(ドクトル)を奪ってみせます。

主 ではよし、おまえに任せよう！あの男の魂をその根元から引き抜いて、おまえがやれるものならば、その魂を、おまえのみちに引きずり込むがよい。

だが、おまえは必ず恥じ入って、認めることになるぞ、

よい人間は、どんなに暗い衝動にうながされても、けっして正しい道を見失うことはない、と、

p 22 現れる、姿をあらわせ！おれは命をやってもいい。(書物を手に取り、地霊の呪文をいかにも神秘的に唱える。赤い焰がゆらめき、地霊がその焰のなかから現れる)

ファースト 悪魔を捕まえた以上、かんたんには手放さんよ。

メフィストフェレス 一年よりもずっと楽しませてあげます。

ファースト オレは、ただ遊びまわるには年をとりすぎたが、なんの希望も持たずに生きるほど老いぼれてはいない。

p 72 低い籠の火の上に大鍋がかけてある。そこから立ち上る湯気の中に、さまさまの形をした姿が現れる。尾長猿の牝が鍋のそばに座り、泡を掬い取って、煮こぼれないように気をつけている。

ファースト あの、きたならしい煮汁で、おれの身体を 30 年も若返らせてもらえ、というのか？

p 80 (さまさまな儀礼とともに盃に薬汁を注ぐ。それをファーストが口にもってゆくと、かすかな炎が立つ)

メフィストフェレス さ、一息に！ぐっと！すぐに心が楽しくなりますよ。

ファースト いったい、あの娘に抱かれる天国のよろこびとはなんだろう？あの娘の胸で温めてもらっていても、いつだっておれは、あの娘の苦しみを感ずるではないか？

<グレートヒェンの部屋>

p 367 お断ちになり、古い衣を脱ぎ捨てられました。そして、新しく着た霊気の衣からは、あらたな若々しい力が湧き出しております。

<神秘的な合唱>

すべて移りゆくものは

ただ比喩にすぎない

達せられなかったもの、

それが、ここで今の事実となる。

名状しがたいもの、それが、ここで成し遂げられた。

永遠の女性たるものが、

われらを引き上げてゆく。

(終)

6月8日、小雨の降りかけた午後。半世紀来のあこがれの作家のふるさと「ゲーテハウス」を訪れた。フランクフルト中央駅から徒歩でも20分ほどの中心街にある。何軒もの他の家と並ぶ5階建ての大きなハウスは、家の前の道路が狭く、全体像をカメラに収めるのがやっとだった。



各階には当時をほうふつとさせる家具や道具類が展示されている。木造の階段を上り展示室に入る。ミシミシ（いやキシキシとも聞こえる）と、40センチ幅ほどの板を並べた床は、歩くたびに音をたてる。床は何万（いや何十万）の訪れた人々の靴に踏まれすり減っている。さすが200年の歴史である。

百科事典やゲーテの作品が並ぶ どの家具類も大きく、繊細で芸術的な飾りが彫られている。展示されている当時の本の厚さと大きさに驚いた。百科事典や「HAURISH SCRIPT HIST ROMANE」などは厚さ10センチ、高さが40センチ近くもあった。私はしばし、ガラス窓で保護された本棚の前にたたずみ、高校時代に読んだ作品に思いをばせてみたのだった。

ゲーテ研究者で作家の立山瑞希氏は池田SGI会長への「ゲーテ協会特別顕彰」に寄せた文の冒頭で述べている。

「日本人に親しまれている作家の中で、ゲーテほど“文豪”という言葉にふさわしい人物はいない。広い世界に多くの読者をもっているばかりか、その作品には思想的な深さと厚みがあり、作家自身が人間としての品格を備えている」

ゲーテが亡くなる直前に書きあげた『ファースト』は人生哲学の塊である。あらゆる学問を究め、知識の無力さに絶望した主人公・ファーストのもとに出現した悪魔・メフィストフェレスは、物語の冒頭で契約をゲーテの家にある時計結ぶ。メフィストフェレスの魔術によってファーストは官能快楽の限りを体験する。しかしこれらのすべてが自身を満足させられないことを知り、最終的には民衆の幸福のための理想



ドイツSGI ヴィラ・ザクセン総合文化センター  
のだ。

的な国土を建設することを決意、他者への奉仕を始めるのである。実際、ゲーテは政治家としても生活に苦しむ市民のために各種の改革を断行している。理想の社会建設に尽くそう——これがゲーテの呼びかけだったのだ。

そんな偉人の跡を訪れると、自分があまりにもちっちゃく思えてくる。それでもなにがしかの啓発を与えてくれるのが旅の醍醐味な

ゲーテはドイツの各地にその跡を残している。ビンゲン市にあるSGI（創価学会インタナショナル）ドイツ総合文化センター「ヴィラ・ザクセン」裏山の高台もその一つである。「ここから見たライン川が最も美しい」とゲーテが言ったという高さ 300 メー



ゲーテ展望台から見下ろすライン川

父なるラインの光景は素晴らしかった。ここからも遠くに古城が見える。3 日前に「ローレライ」伝説の取材のため、クルーズ船に乗ったリュードスハイムが、すぐ眼下のライン川の向こう側に見えたというのも、ドイツ旅行を締めくくるになんともふさわしい流れとなったのだった。



ヴィラ・ザクセンの裏にあるゲーテ展望台  
トルほどの小山。ドイツ在住 30 年  
余りでゲーテに詳しい友人 K さんの  
車で高台に登ってみた。そこには「ゲ  
ーテ展望台」と大きな掲示があつた  
が、なにせあれから約 2 世紀。周囲  
の木々の枝が伸びてきてライン川も  
見え隠れするほどになっていた。

それでも、すぐ隣りの大地から望む